

74 とにかく終わった「社会教育主事講習 [B]」！そこで思ったことは?!

堂本 彰夫

(1) 明日までであるが、私の、公式な？担当部分は終わっている！

コロナ禍での厳しい対応（実施方法）が求められた中、先に紹介していた国社研の「社会教育主事講習 [B]」が、何とか終わろうとしている（明日18日まで）！ただし、私の、公式な？担当部分（全体講義と沖縄会場用講義）は、既に終わっている！とにかく、残念ながら、双方共にオンライン対応ということになり、大勢の受講者への一方的なしやべり（全体講義）と、密接なコンタクト・話し合いが必要とされるグループワーク（ワークショップ/参加型学習）指導？は、これまでにはない緊張と不安が先行するものであった！本当に、難しいものである！しかも、もどかしいものでもある！尤も、通常の対面式の講義が、うまくいっているのかと言えば、甚だ？ではあるので、何とも言えないとは言える？

それはともかく、今回の主事講習は、そうしたオンライン対応のメリット、デメリットが、それこそ如実に示されたという点では、大いに印象に残るものであったことは言うまでもない！この実施に関わっての、主催場の「国社研」の努力・尽力はともかく（オンライン対応自体は、それまでも経験されていた！）、各「地方会場」の対応・準備は、それこそ想像以上に大変であったことであろう！しかも、その地方会場と、私のようなオンライン対応の講師との「テレビ会議（ズーム環境）」の設定とやり取りは、多分初めての試みであり、担当者の負担と緊張感は、最高度なものであったことであろう（ここでは、本当に「ご苦労さん！」と言わせてもらいたい!）?!

しかしながら、それをやるしかなかった（「不承不承?」）とは言え、そこには、いわゆる「瓢箪から駒」、あるいはやらなければ分らなかったということも多々あり、このオンライン活用のシステムが、平時においても絶対に必要であることが、痛感されたことは言うまでもないであろう?!とりわけ、「島嶼県」としての沖縄県では、そうしたしくみと運用のネットワークが必要不可欠であることは、私が、わざわざ言うことでもないであろう！とにかく、距離的な不利（経費等を含む）、（移動）時間のロス等を勘案すれば、むしろ大いに歓迎されるべきものであったわけである?!なお、このことに関しては、島嶼県ではないが、広大な圏域を有する「北海道」において、このオンラインシステムを活用され、自前・自立の社会教育主事講習を実現されたことは（年2回の実施）、大いに意を強くするものでもある！

ただし、この北海道の事例は、そうしたオンラインシステムの存在ばかりではなく、関係者全体の思いや実力（過去の実績を含む）の賜物であることは、容易に推測されるし、そのことは素直に認められる必要があるであろう！「言うは易く、行ふは難し」ということであるが、その実現は、たとえその実現をみなさんが望む（期待する）だけでは、決して実現しないということでもある！このことは、ある意味、冷静に評価される必要があるということでもある！

(2) 改めて、私が期待していた（る?）ものは何か？

ところで、過日、先に終わっていた、私の全体講義「地域課題解決・まちづくりに取り組む人材の育成と活動支援」についての、担当者からのお礼のメールがあった（何とも、律儀な個々への対応である！当時の私の仕事振りからは、とても考えられないことである！尤も、当時は、今のようなメール環境はなかったが?）！それには、『「地域」の捉え方や地域人材の考え方、社会教育における地域人材の実践等について、学びを深めることができました。また、概念図（図2「ひとづくりとまちづくりの循環構造図」→愛称?「曼荼羅図」）をお示しいただきながら御講義いただくことで、教育協働について、深く考えることのできる機会となりました。』とあった。

そしてまた、受講者からは、「地域人材について、ともすると『頭角的に活躍している人』と捉えがちであるが『広義の地域人材』について示唆していただいたことで視野が広がった。」「社会教育の曼荼羅図を連携協力して循環させることが、社会教育主事（そして、社会教育士?）の仕事であることを理解できた。」「事前に資料のどの部分を読んでおけばよいか指示があったので、準備して講義に臨めたのが有難かった。」という感想がありましたともあった。（※括弧分は、私の補足）

多少（かなり?）のリップサービスもあるとは思われるが、私自身は、講義（遠隔）自体は、あまりうまく展開出来なかったという感覚（自己評価→反省?）もあったので、一応は、嬉しくもあったが、複雑な気持ちでもあった。とは言え、とりわけ、受講者の感想の中の、「社会教育の曼荼羅図を連携協力して循環させることが、社会教育主事（そして、社会教育士?）の仕事であることを理解できた。」という部分は、私の秘かな講義（の成果）への願いでもあったので、本当に有難いものであった。その意味で、やってよかったという思いでもある（ちなみに、「社会教育の曼荼羅図」ではなく、「教育の曼荼羅図」と言ってもらえば、さらによかった?）!

それはともかく、今回の（そして、ひょっとしたら最後の?）、国社研の「主事講習」での講師としての期待（願い?）は、全国的な社会教育行政の沈滞?の中で、新たな社会教育主事養成の方向性を、「社会教育主事と社会教育士のスクラム構成」のしくみや活動・活躍の場づくりと捉え、そのことを、受講者（本音としては、実施機関

の国社研や県教委のみなさんかな?)に伝えたいということであった!要は、両者の分散的・分離的な養成となってしまう(私は、そのことは、ある意味大いに考えられると思っている?)、折角の取り組み(新たなカリキュラム)が仇となるかもしれないということである?!

では、そのためには、何が必要か?それは、たとえ働く場所、位置づけが異なるにしても、両者の共通な目標のフレームワーク、思いの結集の形を、ある特定の(共有イメージとして捉えられる)しくみ、取り組みとして提示するということである!そして、それが、全体講義の際に配布した図1、図2、すなわち「制度化の度合いからみた教育(形態)の三層構造とその『統合』のフレームワーク(愛称?「三層構造図」)」と「促進・媒介機能に着目した(公的)社会教育における施策・事業の構造(愛称?「曼荼羅図」)」ということである!

なかなか、講義自体では、その詳しい説明が出来ないのであるが(単純に言えば、授業進行が下手くそなのであるが!),例えば、上述の北海道の取り組みのように、当地の「青少年教育施設」の活用(協力)を図り(いわゆる「地方会場」として!),その協働の形を広げていくということである!したがって、その「(県立)青少年教育施設」を、まさに「地区生涯学習センター」として機能させようとしている沖縄県にあっては、是非、そうした動きを作っていくって欲しいということである!そして、望むらくは、そこに、「社会教育士」を名乗る「(地区)生涯学習推進コーディネーター(仮称)」の配置等を行えば、さらに、この「主事講習」の意義・成果が、顕在化してくるものと考えてるのである!そうした、一つひとつの積み重ねが、必要な姿・形を創り出していくのである!それが、貴重なのであり、現実的な歩みともなるのである!

(3)「社会教育演習(講習全体?)」のあり方について、改めて思ったこと?!

ということで、今年度から新たなスタートを切っている、この「社会教育主事講習」であるが、それに関わっては、一つの思い(提案?)が、私にはある!それは、「社会教育演習」のもち方についてであるが、そこでのテーマ、というよりは、その成果(物)の発表(プレゼンテーション)の想定設定についてである!聞くところによると、そこでは、多様な形で「社会教育士」の活躍が期待されているにも関わらず、従来のように、「社会教育主事」としての「中長期事業計画」の立案と、その「社会教育委員」への説明ということであるらしい?!

もちろん、それは、本家本元の、教育委員会事務局の専門的教育職員としての「(発令)社会教育主事」の専門性(事業の企画・立案能力)の養成ということを考えれば(死守しようとする)、それ自体は妥当なのであろうが、各受講者の、これからの実際の業務・活動の多様性?を考慮すれば、そうした事業の企画・立案を、まさに「社会教育主事」と「社会教育士」の協働によって行うという場の設定、そして、その作業の実際を、シミュレーションしてみるということである!そして、それを、当該自治体の教育長(または教育委員の会議)に提案するという形である!それがまた、都道府県教委を介した、「国社研」の主事講習の実施意義とも言える?!

したがって、一方の「都道府県教委」(今のところは、「地方会場」を実施しているところ!ただし、北海道は、自立/自前の道を歩み始めている!)の役割は、その意味では、改めて重要となるが、「社会教育主事」と「社会教育士」の協働のしくみづくりや情報交流・研修機会の提供という点では、この都道府県教委が覚悟を持ってやっていかなければ、やはり上手くいかない?!否、その責任さえある?要は、それがなければ、同じ資格、同じ専門家としての両者の並行養成の意義が分散される?それでは、何のための「打開策?」かということにもなる?

繰り返しになるが、現今の「社会教育行政」の迷走(二極分化?)の中で、事実上の「社会教育主事」と「社会教育士」の同時養成・並置的配置という、ある意味での現状打開策に、両者のスクラム構築→協働の活動・活躍の場・しくみづくりが、一方で企図されていかなければ、折角のそれが水の泡ともなる?!だから、彼らを創り出して(送り出して?)いく「県教委(推進センター)」の責任が重大となるということである!何故なら、その養成のお世話をしているのは、他ならぬ「県教委(推進センター)」であるからである!

翻って、今、国の「総合教育政策」が動き始めているわけであるが、その具体的、実践的な形である「地域学校協働活動(→教育協働)」の中に、そうした社会教育主事と社会教育士のスクラム構築→活動・活躍の場・しくみづくりを連動させていくことは重要であり、まさに、それは、ユネスコが提唱している「SDGs」の実現のための、「FE」(学校教育)とNFE(社会教育)の協働(合力)と軌を一にするものでもある!その意味では、「教育は一つ!」なのである!だから、そうした大きな枠組み(「教育は一つ!」)の中で、それぞれの地域(都道府県/市町村)の社会教育主事と社会教育士のスクラム活動・活躍が期待されるのもである!

最後になるが、以上述べてきたことは、何度も繰り返しているようであるが、僅かな(一人?の)心ある、そして熱意と覚悟のある職員・スタッフが、どう頑張っても、人事異動やその他諸般の事情により、継続的で、強力な取り組みとはなっていない(繰り返し見てきた?)?!もちろん、それほど、現実には厳しい(堅固な?)ものとも言えるのであるが、気がついた(覚醒した?)誰かがやらなければいけないのである(今までも、そうであったように?)?!そんな中、今までとは違うものを実現しなければならぬとしたら、やはり組織の長(責任者)が頑張らなければいけないということになる!それがなければ、ほとんどは実現しないということである!繰り返して言おう!その最後のキャスティング・ボートを握っているのは、まさに「教育行政」の長、すなわち「教育長」なのである!頑張れ、世の教育長!決して逃げるな!かわすな!あなたの力が必要なのである!